

## あとがき

瀧口修造先生が亡くなつて、この7月でまる3年になる。昨年は瀧口先生とスペインの現代作家のタピエスとの詩画集「物質のまなざし」(詩16篇、石版18点、1975)を展示了したが、今回は先生とわが国の作家たちとの詩画集2冊を展示することとなつた。

そのひとつは「妖精の距離」瀧口修造・詩、阿部芳文(展也)画、昭和12年(1937)10月春鳥会(美術出版社の前身)発行、100部の限定出版で12編の詩と12点の石版が収録されている。もうひとつは「スフィンクス」瀧口修造の詩による版画集で、6編の詩に、北川民次、瑛九、泉茂、加藤正、利根山光人、青原俊子の6氏の版画が収録され、アイデア・久保貞次郎、編集・福島民夫、表紙デザイン・レイアウト・山城隆一、昭和29年(1954)に50部限定で出版されている。両詩画集とも名のみ高く、その実物は見る機会の少いもので、ぼくも今回始めてその全貌に接する機会を得た。

この展覧会のカタログのために巖谷國士さんから「三年ののち」と題するエッセーを頂いた。また瀧口先生の熱心なファンでぼくの若い友人である土渕信彦さんから「切抜帖から」と題しエッセーをお寄せいただいた。この2編のエッセーのためにこの展覧会はまさしく先生へのオマージュにふさわしいものとなつた。感謝している次第である。

当画廊のこの展覧会と同じ時期に、瀧口先生の御出身地の富山県で、県立近代美術館によって、第一回現代芸術祭——瀧口修造と現代美術——(会期7月1日から9月15日まで)、が開催される。これは大変興味深い展覧会になりそうで、ぼくはいまから楽しみにしている一人である。一言ご案内申し上げておきたい。

最後に、貴重なこの詩画集をお貸しいただいた瀧口綾子夫人と土渕信彦さんにお礼を申し上げる。ありがとうございました。

1982年6月25日

佐谷和彦